湖月抄

あとのまき

東京帝國大學圖書之印

# 槿

細 巻名、雲井、詞、

の雲ゐ[スラ]にまがふ雲井よりはみやまの
いろにうつろひぬるかなの花のうつろひはてぬるかなの
いろにうつろひぬるものゆゑあるかなの
なれるこころのうつろひ 西 源氏此一巻九月ばかりのまぎれのるわ
つと、落雲の雲との末と同年なり、雲間之言 細 嘆同

秋院は出ぢくしてのあひだ、さいの院

細 落雲

の奏のまゝに式部卿の宮を
法中納言ばかりにのぼるべし
河海に延喜の帝の御子
のまゝとひろう、雅樂の例
なるべし、秋院は一代に一度
なるべし、安法はいとの男
に服あれはやり給ふ代始に
いとゞぐるしう、仲は式部卿
は帝木末の比まで法の
ふるまひもすわり桐の
壺に式部卿は立のまで落
に又の服にてあり給ふ
やぐ思いの外にてあつて
しかるに西院の外にそ
ふと西院はまつ法師也
おほのとりあつかふよんの
なるべし
西院の法のとくのふとむ
つしとしとしと 飛は壺に
と称ぜるに人なるべし 槿の前
斎院 又桃園式部卿 女天
文 三宮 桃園式部卿 落雲院之

秋院は出ぢくしてのあひだ、さいの院

槿秋院のはじめ

又文のはじめ

槿の

桃園

細 相つぐのはじめ

細 法のはじめ

槿の

細 ほの

の

細 ほの

細 ほの

細 ほの

みう月よりてりてくそ文　細宣旨よりうつ
よ桃園を文ようつりまふとみくくり桃園をハ今の仁ゐるこの院
西一条面中許世尊寺南師氏大納言宰也保元中納言代明親王男傳領
今業敦固親王夏欤延喜帝御連枝并九月廿九日薨ス御大和物語夏等相似
御子母延喜三同延長五年九月七日薨ス御二品兵部卿敦固寛平法四
わ作りよ世ここの山方よりりう水ふ
くくりくん拾遺集よ桃園をよ作々業敦院屏風よ書之
女大文　細式部卿文中連拾也　孟　斉院の伯母なり
このここ　細女大文　細係もそくくく　孟　桐帝のふこ
今をそくく　細桃園　細係の方よハ女大文作給
給りのくわをよ　細式部卿文薨し給て後も
くくとわう給ものなくなき者ハきくり

このくくよ世をそれとこ世をと
の文ハ　花　業の上ハ女ハ三
文桃園の文ハ女五くくそこの
くくという　細三文ハ業上
の母文ハ女ハ文ハ女ハ
くくりの文ハ文ハ

ものくわれよりうくりて文よけくひこ
る　細女大文　ほよ
やくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源と何くゝ人をうらみ
うらみ
三条くゝやすくく
細 三条の母をとり
光 三条源氏をしこ
盃 うゝくゝゆゝとゝ源氏
とむこうれを給ふうゝや
ちくきくく
ひうせ給ふ 細 式部卿宮
桂 秋流と源よ嫁くくき
中ひゝり給ふ 花 右
うゝくゝひうゝとゝ三条よせ
人をくゝまゝくゝひうゝ
とくくうゝ
とくくうゝゆり給 細 まゝ
の女房の御給くゝもよくく
ゆくくくくくくもゝに給
うゝの秋流のゝをくく
うゝはみくくとくめゝ
くゝれくくくくせ 細
くくし給とゝり 所
うゝの秋流のゝれゝくゝ
ゝくくゝをゆくくいひくく
ゝをゝくゝゝゝ

人々をいかいとゝとれゝくくせのゝるげくくく
くめゝくくくゝゝゝゝ
くくゝゝゝゝくくくくくく

河内 神主 神祇 冠 雅

ありし世はみるまゝよ
細 西ゝりの忍ぶ者と異式翁
紫陽の結人作りて世花又
宮の中と垂月 面白き古き
極くえ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
細 年月の方
けなしこそ
細 源の身上以下何事も
不定なる也
人なれど 細 年月は紫陽
まてまてまれ
のゝゝゝも思結ゆゝと
とは結陸ゝとゝゝを
のゆゝとゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

えさう東南の風とりつゝ桜の枝の如く一切の穢乱と後除の義へ 東 祓ひよ後く出給を周河づと
とう八ちゝの風よりもせーとりさすらへぬるんだ海のくらは 中臣稜云 神戸乃風乃亂方に吹天乃
八重雲を吹放津 事乃如久云云 先代舊事本記云伊弉諾曰我正勢也國唯有潮音
而荒迅濤矣乃吹撥し気化為神 号謂風神也 神名級長津彦命次級長戸辺神
仰 永院よ丹こせ一向てそ男女の道をちらひ雷もわるへくれ今くりぬるいをつみへ
ふてもらーうーとのくく
えそをを祓へ 細 源の相 おせーのみをを祓へ 東日一段 仰 えをを祓へうをすーうへ人ををを雷ーてへ
ちちちへ雷ーうとへうちちうーうへ 宣旨をて 奇虎
へ中初く 源氏の志重ちうでえうふーうもはーうーうをを祓てもうあをて
ををうを祓れいみとくだうるをこうちうれ
ーみへくうをつくーーとく
世つるぬはをを後 細 公奇虎へ人ーうーうくく人よちひく方のくごいをうーうり
えををうかやり
細 をちちふへくくのえをうり
なやむし 細 奇虎のを
ーくのはうぬをを女房生
のいくとをふし
すをくーーをやうよ
細 今東へ人のをを而をを
て 云給ふを
世ーうらぬやうをを 細 源氏
根をうる初く引うを思へ門
今をを源の出てみよ ををうる
人のなれうすくををせて

えををうををーとく 仰 ーーよをうーぬやうををとーはーーうをを後のとーうをくを 云給
人のををうををくをををくよ祓てををよをうーぬやうををとのをうり今をを為へをくを
ををーーをうをうもををくををーーうををーーをを初く

まをををくををくををくーーくやををりてをーーを給
ひうーとををくて 細 九月廿九日 歩給るをうり 家をををまをて 例のをを
ををあうーーを 細 九月廿九日 ーーをの愛ををーーをを用をを
本の梁乃 言るひまつけくも 歩をををあーーの
れ表をうをくーーてをのをうりくを歩ーーくを
表みををふくをををーーー

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
人の[illegible]　細　[illegible]
[illegible]
[illegible]

世のハようう　細くくの法き有よ源ハ中くんとあ法く　孟　ろうよつまうよ
ハ　ようわくくもろくくくくも法のもうろく
世中にりう者くく　細世ろよハんくくれあつひりうきく法わうく　孟　女あ
も可ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ろろくいさりくも
妙　紫の上ハ世ろのとり法
ろめろくくもさやくれ事
ありももれよハくく法
つくろろくハろひるひ
仲　ひんのるるもも源
のつるん紫のろくつ
ひるひくるひんの者ニ
ろうつけよめくくめるく
孟　ろうつあハ南ろに
ろうでとハろひるでくるつ
ろくてやくくんとつをまい
とく

山氣ろニるも　孟　法のあ
くくれろやくいるれハ
法く　紫のんるまく
妙　源のかれのあくれう
ろ氣ろうくくるうく
細　ろニ夜ろう
ろ枝ろもうせろうぶろく

ろくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひうけずさいぞうてこゝをみをえうけや
らどうれりはのかりとりとるさな
るべしこゝぬくとゝそどやうのいと
いてうさびよくれいありどとうれみを
ほくわれこゝをめを此四くふと歩せ
行よこゝせのあるこゝをみを此りるる
世れこゝをこゝりそめけやどり
をえりひとてど本まのいろみも
とうつをこゝと笑こゝらどもひ
り

孫奇

いつのまれりびりひをがれ
雪ゝりまこゝあれしこゝねどやこゝをこゝく

細川の鎗のこゝろてさび
つこゝ行少馬帥
生易駿用稀仰鎖溢難
闌白樂天
きのふふとゝるびと後よ
こゝこゝせのあるこ
細考表紙年こゝこゝせのわ
るこゝこゝりる私素こゝこ
こゝせこゝ初こゝの少八孫氏
今年此一冊こ雪月吹
こゝのるこゝびと思こよ
こゝや此年さこゝにぬあり
し多と就こゝ花みこ
こゝせこ開こ天文三五月講こ
佛れ式こ文のこれこ孫
孫のいここゝれこゝこけく
文陳のこゝりやこゝ和のあり
春りこゝりやこゝせこゝこゝ

こゝと殺ゝもせこゝあこゝこゝ孟子表紙よ八こゝこゝこゝせこゝ河内年こゝ
こゝせこゝあり孫氏月こゝこゝこゝこゝせ八三十冊こゝせこゝ海苔多こゝ
せこゝあり孫氏此七冊を海より初こゝこゝ八此一冊今年みケ年こゝれ
こゝこゝせのあるこゝこゝ八方久こゝ年こゝ八こゝこゝこゝこゝれこゝ八こ
こゝせのあるこゝこゝ八方久こゝ年こゝ八こゝこゝこゝこゝれこゝ八こ
いつのまこゝ細せの表こゝこゝ
やこゝこゝこゝこゝ
孫門の鎖のこゝこゝこゝ
こゝ八こゝこゝこゝ
れこゝこゝこゝこゝこゝ
孫氏八樫のこゝこゝこゝ
ゆこゝこゝこゝこゝこゝ
れ年こゝこゝこゝ

細こゝこゝ
こゝこゝこゝこゝ
孫の心
こゝこゝこゝ
こゝこゝこゝ
こゝこゝこゝ
こゝこゝこゝ
こゝこゝこゝ
孟子こゝ
こゝこゝこゝ
こゝこゝこゝ
こゝこゝこゝ
こゝこゝこ

うこうれと　細雅たち
ぬ老人の何く　所原内伯
の何く　おぼ　ぐ　ら　ま　仮
とたるすを原のさうとも
ゆ多の人とそひしまにに
さぬもしまるぬいうめ
しうと根る何く
張のうい
桐壺の帝乃ゆうと

うのえのいでーて
細原内伯ろう　尼ろれを
いろれ　伯　出家の後、男
女とりよ多人と皆ふて
才みと薄ちる氏
ゆるーにふるる藤人と
細原氏ハ今親りおーしの
後ゆりいひをゆらても
立後へきとくあーら
ひをるる原のに怨のふ
くるるけあるるるる
へ　栗　原の伝乃ふ
ているるうこうとと抜と

うぶうきらして、まうろうへありーこ
れどーうーうーうんとうのうこ
さするとーよあるうのうとうぶ
後ようん流のうへいなぐゆくとと
らうせ後ーみどるよりの出るおそ
ある。原内伯のうけといひーひといおうる
りて。このうのれでーてどうのふと
うーうどいるうぐあうんたーぶひうう
後いざうつ式おきーうりぬその世の
帝の代のうれむーぐうよりりりとうう
うよひりもうろぶそうれーし
うれうる。ゆやーよおうう。ひんと

細雅たち
原内伯の
細光清の
細たれうの
細原内伯の
細光清の
原内伯の
細雅たち
細原内伯の
細原内伯の
細原内伯の

愚按此歌のうち細流の五位と引歌とうたてのまこと
義とこのむとこころうりそうのひくらうりゆくさかり源内侍は紅葉賀巻に
今八七十わかりぬべし　源氏八帖一巻
いろもかはらぬ　細　今文に多りうち老のやうに源内侍は思しを老ぬりしうの老ろうのと
とく　源内侍若年とうとく人も多れ上よりうち老の年ろ程よりうとうすくしとうれ
このさうりよ　細　源内侍の年ざりよりいりだりの五位の年ざりよりいりだりの
くうらしとうり　細　為世はいたご罪にをうり給ぶらとうりせか不定之源内侍はうくあ
八通の文ものうくうて作ろうとも
年のわづ多のかりうとく　源内侍は文考
うげさうよ　て今のぶりをくうげなり
程ろうまとしんぶくもわざ
めきみどーうう人の余ろ
ぶくてとうひみどて
わろはこひもうくねせうろ
うく
ふうきめさ　細　く世中の変
と数とにうるすぐさうを
源内侍は宮多のうとを宮話
と芳のうを宮れざうを
年ふれど　細　五位の歌と
はぶぐ五位ぐうりしうく
五位の歌とはうりうく

とひてまう　宮のようはあ
ぬうう　細　花五位ぐ五位とこ
まうおよ五位の形やうに
いりうの歌はまりあとば
とうろう　細　多をうて　細　ぐうめての話
し後世まで歌とうとうく
まはうとうく　盃この世と
宮よまをそううり師ぶ世
うて　はう宮歌をはうまき
うう
ひうう　細　五位
細　ちうの貞女也いとひ
うまもう話りめ
ありうつかいうく　花源内侍
のううぐうつうて
ううもう月うおてとうよ
われは師光の月歌よりぐ
ていううく　細　源海う松葉
みづうう和歌うのあ
うう　ちうもの月歌とうく
但南村流和の松葉まに
ぶうみ　他年はうう
う但清少納言の反元俗が奇

ひうひうひうひうひうとうとうとうとうれぶう　源内侍
ぬうう
うう
うう　源内侍
多をうて　細　五位
ぶうとこの世をうて五位もうとうよ
うう　源内侍
うう　細　五位
ぶうう
ぶうう　今のどうりぶうとうて
うう　細　秋流の山吹
うう　源内侍
うう
うう　源内侍
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう
うう

いさくてやうわ〜てん者の月毛の花ともさしぐりうとそのの月とをうしろ
くそひすのの多とうて冷〜さ物ま云ものらくん いでこ云伯 多 又伯主の奥ここ山ま多
えくう 望ゲ 相同 奥よ 河海よ みくくう 伯 細の伯 表 ー 伯 主の月の 冷ー きる ハ小野 望の
日記 河海よ 引ろう 奥よあり 嫗のあくくうのう いくくうよ 松 芽よよ ちり ひきあ 冷 ひ ひ ひ ひ
ゆくくん

しいでくれて おうくくん こうひいとちあ

やうまくくて ひとくくめくくみどを

人づてなくくて の 冷 つくんと ひ ひ ゆ ろ う

みをとんと 細 秋 陸の 伯 ひ ひ 伯 ん 種 人 伯 ひ ひ ひ ひ ひ ひ ひ ひ ひ ひ

細 秋 陸の 伯 ひ ひ ひ ひ ひ ひ ひ ひ ひ ひ

と学びてみるもあるべきことなれども
ふるうことあるひあり。是すべきものの何よ著よりつくることなりてはあるとも
とあるべきことなりてはあるとも弁欲張の身貧なるものはあるべきものの
之すべきやうこれなくとも盃ふるうとも不用之事
いとくこれあるべよ
源の殿の盃よりはじめ
ことごとくやつるるを恨
みるべく
いとくこれ　細川　給
みるべ也　作　名をとりこれ
みるとはもれくしき
みるよりてと宮つくいさ
らいとやあるこの給あり
をとだることの家の山をる
いとや川いることこと
給るるくこれ
みるべくみるあくん
盃をよさみるくぬ人を
のみくん宣旨よ源のこと
らひみるとこと給宣旨
みるよは　りきこと
みるとんちくぬ人の作よ
みるあくんとこと
人くもあるくこれ



とこと給てこと給よはいくこ設め作りくこと法白
ふこりりとあるひあり是すべきものの何よ著よりつくることなりてはあるとも作りふこりり
とあるべきことなりてはあるとも弁欲張の身貧なるものはあるべきものの
之すべきやうこれなくとも盃ふるうとも不用之事
いとくこれあるべよ
源の殿の盃よりはじめ
ことごとくやつるるを恨
みるべく
いとくこれ　細川　給
みるべ也　作　名をとりこれ
みるとはもれくしき
みるよりてと宮つくいさ
らいとやあるこの給あり
をとだることの家の山をる
いとや川いることこと
給るるくこれ
みるべくみるあくん
盃をよさみるくぬ人を
のみくん宣旨よ源のこと
らひみるとこと給宣旨
みるよは　りきこと
みるとんちくぬ人の作よ
みるあくんとこと
人くもあるくこれ

源の殿
宣旨
作



給
給
給

（略）

細 妖怪のんづひやう

くさぐさのんく

世のんのいさぐさを

盂原のんをとけまんまり

てこの海をとんとんとん

のいんねをいはんやまと幸

よ行きまく

ゆくとかく 細 素晴にえ

えばせろんもけきまろ

べし 長とちらぐたて

ひろびまろぬろべし

花者ゆくとうとあるさ

とあまさ素晴よみえ

びくもこそありつめと

ちやうんし 此物語よ 伝説

り

（略）

細 盂原の弟本巻にあり

しづとゆやあてはやま

しとく 弟 引とんぐて

ありとうとおびあり

ぐとう

けよくとんのはありこの海

所原のはありさ海を丸

て盂 春流のはすを原

くく 物月 愚按抄盂 蛇

よとさぐて世のはりあり

まりくと後とうてはの

とありいとこうはのすり

くとうくこそれとの

和の者まりあとへまき

て物りとれいとて和

と細盂こそ原のはすの

りあれ沖伝説しや

（略）

細 原を抜て此所

人者わんぐとよはをとつくし ゆくまんへ

まれひとうとをとくくゆうも ひとう

よとをとをとくくゆうし 細 もしう原氏者のはんの弟をとくさあくく

らうくゆ 此はぐくれがらよはがい

しまりあくくもどうれるこれ色

のうれまきよはげけてやこうんもくらあく

げはとくこんのはありこの海のはがくこと

よあくくもはくくりのとはくはがとり

世のんのはうとけらめをこくあるめ

まて者とりあとあるとけてはがさ

るれば今こくのはあごげとけて世乃

りくこをはりまがくくひるくくんく

（略）

細 [illegible]
それハとりそこなれども 師 それハ 各別の身をそう恨まんべきまつもあるべきとこそ
らとこさもあるべきとハ自然よこそんとこそ

[illegible]

[illegible]

細 [illegible]
[illegible]

細 [illegible]
[illegible]

[illegible]

細 [illegible]
[illegible]

[illegible]

細 [illegible]
[illegible]

発孟諸秋の秋くれはよりあり
きすまきあげませ　細　香炉峯雪撥簾看の心
雪まちづ　村上帝の御代　応和二年　国十二月九日
石清水志賀の郎者則
堆雪作蓬莱山上
うむらぶ　細　よろこぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　

日の宿よ吉つみ〜う方うを内役よ武戸西右陰まつりうれば芝ゝねつぐして物ゝ
みよ吉の山他をまつぬ布〜そみうれば布の蓋ゝ物他ら世〜世ゝ世ゝ世ゝ
夜の西布よ他ら〜れうう芝他夜みう他ら世〜世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ
みう吉の山布〜〜よみりよりうれば布山長法二年法長保二年の布事也物
他ゝ寛弘のゝうれ一年ゝ云び事れ又吉山よハ蓋人石毛皆とゝうて
山を法ゝ布の吉を蔭ゝゝゝ物みう布ゝ山中文ハ落吉云女夜也世よみうゝ
吉山ハ芳ゝうえのあゝゝうびゝゝみ花山夜法宗夜の布の南八蓋に吉
山他ゝれゝ他文みうゝゝゝ小右記よみゝゝう寛和元年正月十日のゝゝ也
ゝゝみゝ　ゝゝみゝゝゝれゝゝゝゝ西ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
布みうゝうゝ　落吉の内裏よみう吉一布のみうゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

女郎花

月のしげるとみるまでに今の世はかくこそ
しるけれ女郎花
けゆく月のかくれなくこそ
なりけれ女郎花
なれば
へしつつ
つれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のゝゝや 細 各留まる庭ふ

げゝぬゝの淋しうやまどうんと歩びて

花葉のゝゝ盃一ゝ池中

例の泥水の如く

萃盡滿花萃 惣見件

ぞうゝけうゝく

生人各留半座乗萃

乗待我窮浮同行人五會讃

けゝゝゝ人と 細 いゝゝゝよゝゝひゝく 行ふことを生れはゝうゝゝまゝゝゝゝゝゝゝハ

ミつせ川をゝゝゝゝゝ